

第3回 森林環境教育・木育のあり方検討会 議事概要

日時：令和2年6月12日（金） 13:00～16:00

場所：勤労者福祉会館 6階 研修室

検討事項

- (1) 大杉谷自然学校での活動から
- (2) 木と人の命を育むためのマネジメントを目指して

1. 大杉谷自然学校での活動から

NPO 法人大杉谷自然学校 校長 大西かおり氏

現在は、人と自然が共生する生活様式が減少しており、子どもと自然との距離も遠くなっている。

- 自然との関わりのある暮らしは、
 - 心の柔軟さや適応力、忍耐力（自然は私たちの思い通りにはならない）
 - 創造力、想像力、創意工夫を育む（自然には想像の余地や未完の部分がある）
 - 多様性を認め合う優しさ、寛容（自然の中では助け合わないと生きていけない）
 - 身体能力（自然の中で暮らしているだけで身体が鍛えられる）
 - 自然への畏敬の念、命のつながり、感謝の心
 - といったものを育んできた。

大杉谷自然学校では、小学4年生を対象として、教室での授業に加え、実際に伐採、搬出、市場での競りを体験し、得た収入をみんなで使う、というプログラムを18年間継続している。未来の職業選択という点では成果が出ていないが、林業ファンを増やすという点では、大きな効果があると考えている。

生活、社会や人々の思考が常に変化し、答えが不確かな現代こそ、自分で考えて選択し、行動できる人を育む必要がある。

林業が発展するためには、木が使われる必要があるが、そのためにも、木の文化を復興させる必要がある。自分で考えて選択し、行動ができる人に育

てる教育は絶対に必要である。

木が使われるために、「1日10個三重の木運動 (touch ten mie wood a day)」を県民の皆さんへ働きかけてみるのはどうか。

2. 木と人の命を育むためのマネジメントを目指して

木育松井塾 主宰・元岐阜県立森林文化アカデミー 教授 松井勅尚氏

- 木育とは、木や森と人の命の両方を大切にすることを育む活動。人が、森あるいは自然と一緒にどうやって生き残るか。自然の命も大事にしながら、人が生き残るための教育である。
- 子どもから大人まで一貫した人づくりを実現させるためには、教育にマネジメントという視点が必要。マネジメントとは、「人に関わるものであり、その機能は、人が共同して成果を上げることが可能とし、強みを発揮し、弱みを無意味なものにすることである。(ドラッカーの言葉)」である。
- 今回のビジョンづくりのキーワードは、「捉え直し」ではないか。三重県では、これまでも森林環境教育・木育の活動を十分しており、ビジョンは、自分や自分以外の人が行っている森林環境教育・木育を捉え直すきっかけとなるものとすべきではないか。
- 関心がない人を森林や林業に惹きつけるためには、その強みを共有することが必要である。しかしながら、私たちは、しばしば自分の強みには気が付かない。岐阜県と比較して三重県の強みの一つは、山と海両方があることではないか。
- 捉え直しのための視点は、共通価値の創造 (CSV Creating Share Value)、日本的SDGsで捉える、コロナを踏まえる、である。
- 共通価値の創造 (CSV) 本来の意味は、社会的な課題を自社の強みで解決することで、結果的に経済的な価値をも創造することを言うが、私が提案したいのは、二項対立を同時に解決するような思考的アプローチである。子どもと大人、林業と漁業、強みと弱みといった、対極にある概念に共通項を見出すような考え方が、今回の、森づくり(産業)と人づくり(教育)という二項対立をビジョンの中で融合させるために重要ではないか。

- 日本的SDGsの、日本的とは、人と自然を分けず、人間も自然の一部という考え方。林業以外も含めた産業界の理解や共感を得るためには、SDGsの視点が不可欠。
- コロナを経験し、新たなライフスタイルを模索する中で、改めて、暮らしに丁寧に向き合うことが大切ではないか。自分たちで道具を作り、手入れをしながら使っていく木の文化は新しいライフスタイルを提示しているのではないかと思う。
- また、コロナ禍の中で、さまざまな共有と連帯の可能性が提示されているように思っている。現状や課題を共有し、連帯することで、今まででは考えられないような新たな展開が生まれてくる。
- コロナ後、日常に戻りつつあるとも言われるが、今まで通りの日常に戻ることが必ずしも望ましいとは限らない。木(森含む)の命も、人の命も大切にできていない日常に単に戻るのではなく、どう変えていくのかを考える機会である。
- 捉え直しの指標として、IWI(包括的な豊かさの指標、GNPに代わる経済指標)を使ってみてはどうか。IWIは、GNPでは捨象されるような自然資本や人的資本、社会関係資本を評価する。
- ビジョンにおける現状認識と解決の方向性として重要なことは、自然資本である森林について、伐期を迎え資産価値が最大であるにも関わらず、十分利用できていないという課題があり、その課題の解決には産業と教育の連携が必要ということ。
- 誰もが学ぶ義務教育において、森林の自然資本として重要性をいかに伝えるか。その際、林産業界からも、人づくりにどれだけ積極的にアプローチできるか。三重県の強みを義務教育の中に、落とし込みながら、共通価値を創造していくことが重要。
- 自然資本としての森林から価値を生み出すに当たっては、単に木材資源としてだけでなく、森林の空間としての多面的な活用を通じて利益を生み出すことも重要である。

- 日本は、神様さえ労働する国である。労働することが罰ではなく、喜びであるという思想である。教育と最後の労働を結びつけたものを三重県に作って欲しい。それがまさに一気通貫だと思う。
- 社会関係資本である人の繋がりも、森林環境教育・木育に取り組む方法として重要な要素である。また、人づくりも山づくりも木でつくすることも、時間や手間暇がかかるが、授業時間という制約にとらわれすぎず、必要な手間暇を惜しまず、丁寧な暮らし方こそコロナ以降の「新たな生活様式(ライフスタイル)」ではないか。

3. 意見交換

- 新しい学習指導要領の理念、社会に開かれた教育課程が謳われているが、林産業界と学校、あるいは高齢者と子どもの繋がりを生み出していくことが重要ではないか。
- 学校で森林環境教育・木育を地域の人を巻き込んで行っていくためには、子どもからの体験を重ねて、協力することの喜びを知ってもらう取組も必要。
- 学校で森林環境教育・木育を行う時に、地域の方々の協力を得ることも大切であるが、先生自身が、森の事を伝えられるようになることも必要である。現在、みえ森づくりサポートセンターと三重県総合教育センターの共催で行っている、教職員向けの研修を、回数を増やすなど、普段の教科の中でできることを教職員に知っていただける仕組みづくりを、ビジョンに盛り込んでほしい。
- 天然林と人工林及び林業の関係をビジョンではきちんと整理すべき。そうしないと、森林や林業、木に関心のない多くの方々からは、結局、林業振興へもっていくためのビジョンと思われ、共感を得ることが難しくなると思われる。
- 林業の担い手育成のためなのか、将来の木材消費者の育成のためなのか、あるいは森林に関する教養を育てるためなのか、例えば、子どもには、森林の環境の部分も林業についてもしっかり勉強してもらう一方で、大人に対し

ては、木の消費に的を絞って森林環境教育をする等、森林環境教育・木育の目的や取組手段について、きちんと区別して論じる必要があるのではないか。

- ビジョンには、三重県らしさをしっかりと入れるべき。県民が読んで、「そうだよな、三重県にはこんなにたくさんいいところがあるよな。」と思えるようなビジョンにするべき。その上で、なりたい姿を示すに当たっては、それを目指す必要性が、万人が共感できるものであることが重要。
- ビジョンは、学校教育サイドに提示した際に、どこが学校教育と関係しているのか、具体の対象とねらいは何なのかが分かるようにする必要がある。
- 森林環境教育は、課外ではなく、義務教育の中で行うべき。義務教育の中に、森林環境教育の要素を溶け込ませるために何ができるのかを整理する必要がある。
- ビジョン策定後の具体的なステップや仕組みについてもこの検討会で議論したい。現状で何が足りておらず、どんな仕組みが必要なのかを確認したい。
- 森林文化、木の文化を必ずビジョンに入れてほしい。常に手入れして、長く木を生かす、美しいものを長く生かす、その価値を十分評価してこそ、新しい未来の、きちんと森林を使っていく考え方が生まれてくるのではないか。